

働くことと生きること ~ワークシェアリングの持つ可能性~

外国語学部ドイツ語学科4年 白石萌

近年日本では「氷河期」とまでいわれた就職難の一方で少子高齢化が進み、将来的な労働力不足が問題となっているが、これは先進諸国に共通した現象である。働くことは人生で大きな意味を持つが、グローバル化によって企業に国政的競争力が求められる中、失業、労働力不足のどちらを考えたとしても労働・雇用環境は厳しさを増し、それが生活にまで影響している。本稿ではオランダで導入されて大きな成功を収め、ヨーロッパ諸国へも波及したワークシェアリングという考え方を紹介するとともにどのようなかたちであれば日本にも導入できるかどうかを検討する。

本稿の4章構成となっている。第1章ではまだ日本に馴染みの薄いワークシェアリングの成り立ちと大まかな類型を紹介する。第2章ではワークシェアリング発祥の国オランダと、ドイツ、フランスの取り組みを紹介するとともに、それらを比較、考察する。第3章では日本のワークシェアリングに対するこれまで取り組みを、特に政労使の協調に比重を置いて紹介する。4章ではそれまでの章を踏まえた上で、現実的にワークシェアリングを導入するためにクリアすべき問題の提起と、可能な限りの解決を試みる。

上記の事柄に対する理解に欠かせないものがワークシェアリングの分類である。筆者はこれを大きく失業対策型と多様就業型にわけている。前者は読んで字のごとく失業問題対策のためのワークシェアリング、後者は就業スタイルに幅を持たせるためのワークシェアリングである。どちらのタイプも発祥はオランダであり、オランダでは失業対策型のワークシェアリングを進めた後に多様就業型ワークシェアリングに切り替え、今なおワークシェアリングを推進している。一方日本は失業対策を目的としているにもかかわらず、導入の当初から失業対策と多様就業の二本立ての政策を取っており、筆者はそれを批判するとともに企業に新規雇用拡大のインセンティブを与えることの難しさも指摘している。

本稿では、現在日本では雇用情勢は回復しつつあり、将来的には労働者不足の懸念もあることから就業形態に幅をもたせることができる多様就業型ワークシェアリングの導入について特に検討している。